

巻 頭 言

最近、自己成長の研修会に参加した。その時「その日その日の暮しをするだけで十分なのだ」
「“その日暮し”を大切にしよう」と思った。

研修会では、各自が自分の対人関係や日常の生活上で、問題となっていることを取上げ、それに関わる自分を変革しようと取組んでいる。年に数度開かれるこの研修会に毎回のように参加している人もいる。そう言えば、この種の研修会に参加する人の中で、日毎の暮らしを受けとめ、それに会っていくよりも、研修会に参加する事が第一の目的になっている人もいる。所謂“研修会廻り”になってしまっているのである。今よりも良くなろうとして、変革の目標を立て、それに向かって努力をしているのはいい。しかし、その過程で何かが歪みだすことがある。

イエスが宮潔めをされた記事を読んだ。「イエスは宮の庭で売り買いしていた人々を追出しはじめ、両替人の台や、はとを売るものの腰掛をくつがえし、また器をもって宮の庭を通り抜けるのをおゆるしにならなかった。そして、彼らに教えていわれた『わたしの家は、すべての国民の祈りの家となえられるべきである』と書いてあるではないか。」(マルコ11:15～17)

本来、神殿は人々が神を拝み、感謝し、祈願をするところである。それがよりよく、便利に出来るようにと、供え物を用意したり、サービスする人が出てきた。それが両替屋であったり供え物の動物を売る店であったり、それらの店を取りしきる宮司達であった。効率よく便利に、そして立派にというのであったのだろうが、どうもその辺から、本来の目的から外れてきたものが出てきたようである。

私たちは、学校を作ったり、教育をしたり、会社を作ったり、ボランティアの奉仕団体をつくったり、いのちの電話を作ったりして、そのために工夫をし努力もしている。しかし、その努力の営みの中で何かが変質してくる。その様な事によく出会う。そして、所謂立派なものを作るという目標が高いほど、その変質はひどくなるようだ。

私はもっと近くにある目標で大切な事があるのではないかなと思う。例えば、今、目の前にいるNさんとお茶をのんでいる、そのことを嬉しいと喜ぶとか。旅先から家族に電話をかける事が出来てよかったとか。野菜の種を蒔いたがうまくいかなかった、少し工夫をしてみようとか。御飯が美味しかったとか。今日も一日過す事が出来たということを受け止めて、その日を感謝して終わる、そんなことが大切なのではないだろうか。大事な事、なすべきことはそんなに多くはないように思う。

大きな目標のために、苦勞を背負い込んだり、本来身近にあった目標を見失って、歪みの中に陥ってしまったりしていることが多いと思われる今日このごろ、「その日暮し」という“変数”で自分の生活を捉らえてみる必要があると思う。これをなくすると、我々はどこにいくか分からなくなるのではないか。現代文明に生きる人間が自分の役割と責任に気づくためにも。

イエスは言われる。「明日のことを思い煩うな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞はその日一日で十分である」(マタイ 6:34)と。(中 堀 仁四郎)